

校長ナベちゃんのみちのくひとり旅日記 その9

なんとか釜石に到着。ホテルは駅のすぐ横である。目の前には、新日鐵住金の大きな工場がある。新日鐵釜石という、とてつもなく強いラグビーチームがあったなあと思い出した。

とりあえず、旅装を解き風呂に入る。すぐそこに東北の山が迫っている。樹木が青々と茂っている…と、聞こえてきたのは蝉の声。しかもヒグラシ！7月中旬だから、これからが夏本番なのに！ちょっとビックリした。私にとってはヒグラシは、8月盆明けの夕方の風情なのだ。

脱衣場で機器の点検をしていた若い従業員に声をかけてみた。日頃から聞き慣れているせいか、ヒグラシを特段不思議がることもない様子だ。釜石育ちという若者に被災の様子を聞くと、自宅は全部流されてしまったという。「家族はみんな無事でしたけど、あとは全て津波に持って行かれました。」とあっさりと話してくれた。ええ～っ、はあ～っと思いつつながら大変だったねと答えたら、ニコッと笑い、仕事を続けていた。

『釜石の奇跡』はご存知だろうか？東日本大震災により、釜石市も大きく揺れ、続く津波で大変な被害を受けたところである。人口3万9千人あまりの市で、死者行方不明者1040名となってしまった。家屋倒壊は3千6百戸を超えている。その中には津波で全壊した学校も含まれている。しかし、釜石市の小中学生約3千人の生存率は99.8%であった。ほとんど生き残ることができたのである。地震・津波発生当時学校にいた児童生徒はもちろん、自宅にいた子どもも、的確な判断をし自分の命を守ったのだ。

特に、釜石東中学校の生徒たちは、校内放送が壊れても教師の指示がなくても、自主的に校庭を駆け抜け、「津波が来るぞ」と叫びながら指定されていた避難場所へ移動した。日頃から一緒に避難訓練を重ねていた、隣接する鶴住居小学校の児童も続いた。

ところが指定の避難場所は、裏手の崖が崩れそうになっていたため、男子生徒がさらに高台へ移動することを提案し、避難する。途中で避難してきた幼稚園児と遭遇。ある者は小学生の手を引き、ある者は幼児が乗るベビーカーを押して走った。間もなく、最初の避難所は波にさらわれた。間一髪で高台にたどり着き、事なきを得たのである。

災害の大きさに比べ、人的被害が少なかったこと。中でも小中学生の落ち着いた行動は、防災教育の模範とも言われた。このことが『釜石の奇跡』と呼ばれるようになった。

三陸地方は昔から津波に襲われてきた歴史がある。明治29年の明治三陸大津波では、釜石町(当時)の人口6529人のうち4041人が犠牲になったという。しかしながら、歳月が過ぎると市民の危機意識は薄れていく。そうした中、自治体ぐるみで防災教育に取り組むことを提案してきたのが、群馬大学の片田敏孝教授である。

2006年から始まった釜石市全体での津波防災教育。最初の頃の子どもへのアンケート、「家に一人でいるとき大きな地震が発生。あなたはどうしますか？」ほとんどの回答は「親に電話する」「親が帰ってくるまで家で待つ」であった。「津波が起きたとき、あなたのお子さんの命は助かると思いますか？」と問いかけられた保護者も意識を変えざるを得なかった。大きな堤防をつくり、防災を行政に頼るだけではだめなことに気づいたのだ。その後、親子で参加する防災マップづくりや避難訓練の実施につながっていったという。釜石市内の小中学生の親で亡くなった人の数は、市全体で亡くなった人の割合と比較しても少なくなっている。学校での学びが、親の命を救ったと言えよう。

川沿いの僅かな平坦な地に釜石の町がある。ホテルからは海の様子は見えない。見えない海からやって来る津波の恐怖と戦いながら、日頃から積み上げてきた訓練と知識を総動員して、自らの命を守った子どもたち。子どもと共に学ぶことで、子どもの無事を信じ慌てずに的確な行動につながった親。「想定外」を乗り越えさせたのは、教育で子どもたちが身につけた対応力の賜物であり、決して偶然が作り出した「奇跡」なんかじゃない。片田教授はそう言われている。

釜石駅前のモニュメントを眺めながら、さっきのホテルマンも地震当時は中学生だったかもと思った。(年内終了できず (^\_^;) 続く…)

青葉の詩

あおほのうた 第18号

菊陽町立菊陽南小学校  
校長 渡邊浩文

H二十九年お世話になりました！  
H三十年よろしくお願ひします！  
年をまたいでのご挨拶になりました？！

長いようで、あっという間の二

過ごしてくれました。

学期でした。毎年のことですが、

もう少しで、平成二十九年、西

行事が盛りだくさんの日々でした

暦2017年が終わります。今年

が、子どもたちは元気いっぱい

も大変お世話になりました…と、

年末の挨拶をしたものの、この通信を年の初めにご覧いただくことになる方も多いかと思ひます…

皆様、健やかに新年をお迎えのことと拝察いたします。明けましておめでとございます。今年も、

菊陽南小学校、児童職員一同並びに学校通信「青葉の詩」を、どうぞよろしくお願ひいたします。今年も皆様にとってよい一年となりますようにお祈り申し上げます。

年末と年始の挨拶を同時に申し上げます。通信を発行するタイミングが悪く、なんとも

間が悪い事となりました。新年は何事も計画的に、早め早めに取りかかることを目標に掲げたいと思います。さて、どうなることやら。

最後に、各校から集まった大会実行委員が作成した集会宣言文案が発表されました。夏休み前からミーティングを重ね推敲してきた文章は、子どもの目線でわかりやすくいじめや差別をなくそうと呼びかけ、行動することの大切さを訴えています。読みながら驚き、そしてこんな子たちが大人になったときの社会を想像するとうれしくなってきました。

の六年生三人。矢野煌莉さん、中原望晶さん、内賀嶋ひなのさん。あの長い宣言文を、三人で分担し暗唱して、参加者に提案してくれました。まっすぐに参加者の方を向き、ひとつひとつの言葉を大事にかみしめながら発表しました。聞いていた人たちの中に、しっかりと刻み込まれていくようでした。

十二月九日(土)菊陽中学校体育館で、菊陽町の小中学校の子どもたちが集まって、「部落差別をはじめあらゆる差別をなくす第三十三回菊陽町人権子ども集会」が開かれました。今年の菊陽南小学校は、展示発表でした。ステージでは、武蔵ヶ丘中校区の小中四校が、日頃の学びを劇や構成詩として発表

さらにビックリしたのは、この宣言文を発表したのは、菊陽南小

大会終了後、多くの方が南小の子どもたちに感動され、私に声をかけられました。ステージ発表や展示発表にも負けない、素晴らしいものを見せていただきました。